平成27年(2015)
阿づまの光
9月号・Septembro

五代教主作 灰釉茶盌 銘「大和三山・香久山」
【聖地の土＋梅松館木の花桜花びら釉】

題字出口直日
通巻第558号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com

今月の聖言

あたたかき言葉の花は人みなの
荒き心を和むものなる

出口王仁三郎聖師

大和言葉

関東教区特派宣伝使　小藪資史

最近、書店や広告などで「大和言葉」に関する本をよく目にします。

手元の辞書で大和言葉を調べてみますと、「日本固有の言葉。漢語・外来語に対していう」とあります。

私にとって大和言葉といえば、礼拝や祭典で奏上させていただいている「祝詞」で使われている言葉、また「和歌」に使われている言葉という印象が強かったのですが、前述の本は、日常会話の中で日本固有の言葉である「大和言葉」を積極的に使いましょうというものが主流のようで、私もそのうちの一冊を手にしてみました。

その本によりますと、中国から取り入れられた「漢語」や、それ以外の国々から取り入れられた言葉である「外来語」は、新しい言葉が作りやすかったり、おしゃれな印象があったりして、ますますよく使われるようになっていますが、「大和言葉」には、日本の風土で培われた優しく懐かしい響きがあり、それを使うことによって、心に染みる味わい深い表現ができるということです。

たとえば、物事や気持ちの程度が大きいことを表すのに、「このうえなく」や「こよなく」と表現すれば、最近良く使われる「チョー（超）」などの言葉にはない、柔らかさと穏やかさを持った表現になる。「妥協する」という代わりに「折り合う」と言えば単に引き下がるのではなく、大人の対応という印象に変わる。他には、感動を表すのに「胸にせまる」などと表現すると、心を動かされたことがより伝わるなどとあります。

聖師様は日本について「言霊の法（のり）清く美しく、円満にして朗（ほがら）かなり。故（ゆえ）に我国（わがくに）を言霊の幸（さちは）ふ国、言霊の天照る国、言霊の助くる国、言霊の生ける国と、古（いにしえ）より言ひ伝ふ」とお示しくださっています。

我が身の言葉遣いを振り返れば恥ずかしい限りですが、言霊の幸ふ国で育まれてきた大和言葉に、善い思いをのせて、使わせていただくことができれば…などとにわかに思ったりしています。

大本公開講座

日本人と〝はらい〟

～目に見えないものを大切に生きる～

大本教学委員
成尾（なるお）　陽（あきら）

物質的進化の反面……

現代の便利な交通機関や電子機器などの発達をみると、物質的には出口王仁三郎聖師が提唱した「みろくの世」「理想世界」は、そこまで来ていると思われます。東京・大阪間を約一時間で走るといわれるリニアモーターカーの誕生や、身近なところでは、電話とメール、カメラ、インターネットなど、さまざまな機能が一体となったスマートフォンなど、少し前までは考えられないほど技術が進歩しています。

その一方、精神的な面はどうでしょう。4年前の東日本大震災で、日本人のとった行動と精神性が世界から賞賛されたことはありましたが、果たして時代とともに進化していると言えるでしょうか？

今日は、その日本人の精神性について「祓（はら）い」を話題に考えていきたいと思います。

〝祓い〟とは

〝祓い〟という言葉を広辞苑でひくと「災厄（さいやく）を除くために神社などで行う神事。またはそのお札（ふだ）」とあります。災厄というと一般的に身近なのは厄年（やくどし）ですね。本厄、前厄、後厄などがありますが、実際これは目に見えるものではありません。

こうした厄や災いといった目に見えないものに対して、日本人は古来から、敏感な意識をもってきました。日本人が精神的なものを重んじ、精神性の高い民族といわれる要因のひとつでもあります。

日本人は災厄というものが、日常生活で少しずつ溜まっていくものと考え、自分やその周囲に溜まった災厄を、折にふれ払い除けたり、災いを起こす霊を鎮めたりしてきました。そのような儀式や身近な行為は、日本の伝統的な文化のなかに、さまざまな形で残っています。

祓い清めの型

たとえば、茶道では、お茶を点（た）てる前に茶筅通しという、茶筅をお湯ですすぐ作法があります。これは再度洗っているのではなく、〝祓い清めの型〟を表しています。同様に袱紗（ふくさ）で茶杓（しゃく）や棗（なつめ）などを拭くのも、祓い清めの型〟です。

また、大相撲の横綱土俵入りで行われる四股（しこ）は、綱を締めた神が醜（しこ）（醜女）を土の中へ踏みこむ、という祓いの意味があるといわれています。

このように日本文化の中には、祓い清めの型を通じて、物事を順序よく進めるということが重んじられているのです。

心の汚れと清潔主義

「身の垢は湯水石鹸であらへども洗ひがたきは心なりけり」という聖師の道歌があります。

体についた目に見える汚れなら、すぐに落とすことができますが、心の中についている汚れ、例えば妬（ねた）みや嫉（そね）み、恨（うら）みや自分中心的な想念は、なかなか自分では気がつきにくいもので、こうしたものは、罪や穢れとなっていきます。

罪というのは、自分が犯したことを「積み重ねていく」、あるいは「包み隠していくこと」だと言われます。また、穢れというのは「気が枯れる」、気持ちが消極的になっていくことで、こうした「洗いがたいもの」を落とすのは、なかなか難しいものです。

大本には「四大主義」という生活実践の原理があり、その一つ目に「清潔主義」という教えがあります。「清潔主義」は〝心身修祓の大道〟といい、目に見える物質的な方面だけでなく、目に見えない霊的な方面の清潔が重要であると説かれています。

一般的に「お祓い」は、神社で受けることが多いですが、本来これはとりもなおさず神さまに向かい、近づくということでもあります。

神社のお宮の奥によく鏡が置いてあります。かがみ（鏡）から、真ん中の「が（我）」をとると、かみ（神）になることから、鏡に自分の心を映し我をとることで、神さまに近づくという意味があると言われます。神社でお参りやお祓いを受ける時は、手を合わせると同時に、我をとり自分の心をさらけ出し、省みることを心掛けてはいかがでしょう。

本来、身についたものを祓う動作は、気が向いたときにだけ行うのではなく、できれば毎日励行するのが良いのです。掃除でも毎日していれば、出てくるゴミは少なく、時間もそれほどかかりませんが、一年に一回程度しか掃除をしない所は、頑固な汚れになっていて、なかなかきれいになりません。祓いも掃除も、できるだけ頻繁に行った方が良いということです。

伝統的な精神を受け継ぐ

実は掃除の仕方にも、日本人の精神性は隠されています。今はハタキや箒を使う家庭は少なくなって、掃除機を使うところがほとんどだと思います。昔は上から順番にハタキをかけて、畳や床の上を箒で掃くのが普通でした。障子の桟や欄間にハタキをかけることで、「ここをきれいにしよう」とする〝気〟が入ります。客人を迎えるための玄関先の打ち水も、祓い清めの意味があります。

こうして、昔は親から子へ、子から孫へと日本人の生活様式が受け継がれ、人にも物にも敬意を払い、順序を重んじて、それらが「祓いの型」として自然に受け継がれ、日本人は心を豊かにし、感性を磨いてきたのではないでしょうか。

しかし、現在では、物質的な進化とは逆に、日本人の精神性や感性が、稀薄になりつつあるように思われます。

〝ありがたい〟と思う心

冒頭にのべた「みろくの世」について、聖師は「善いことをすればよくなり、悪い事をすれば悪くなる世を称してミロクの世という」と示しています。政治家がよく「禊（みそ）ぎが済んだ」などとまったく別の意味で使うことがありますが、これからは神の力が強くなって、自ずと世の中の祓い清めが行われ、悪いことが隠し通せなくなり、虚偽や偽善が通じない世界が来る、これが「みろくの世」なのです。実際今、世の中の事象をよく見ていると、確かに悪いことは隠し通せず、次々と表に出てしまう時代が近づきつつあるようにも思います。

〝祓い〟の意識をもつことは、自分の心の中に積もった悪い想念を取り除きたいという気持ちでもあります。これは自分の気持ちが神に向かうことにつながります。つまり、神仏に素直に帰依する心が持てなければ、本当の意味で祓いを受けることにはならないのです。そう考えると、〝祓い〟とは神さまの〝救い〟でもあります。

出口日出麿尊師は、

「どんな場合でも、〝ありがたい〟と思う心、これは神に近づく第一歩である」

と説いています。順境のときに「ありがたい」と思うのは、誰でもできます。しかし、どんな場合、特に苦しい場面でも「ありがたい」と思うことは、至難の業です。

日々の生活のなかで、苦しいとき、辛いときこそ神さまに向かい、「ありがたい」と思えるように心がけることが、深い心の清め、魂の向上へとつながるのではないでしょうか。

掲載文は、平成27年5月20日に航空会館（港区新橋）で開催した「大本公開講座」講演録の要旨です。

日本人が古来、大切にしてきた
〝はらい〟や〝きよめ〟。
あらゆる分野で迷走する現代こそ、
〝祓い〟の心を取り戻す時かもしれません。

東光苑月次祭

東光苑月次祭は8月9日、午前10時30分から、斎主・藤本光総務管理課長のもと執行され、293人が参拝した。

祭員は東京主会、少年祭員は東京主会の涌井三四郎くん、石川可純さん、成田小春さん、小巻さん姉妹、伶人は宮　会関東支部、大本神諭拝読は澤邊雅一茨城主会青松会長、添釜は中村社中が担当した。

祭典後、猪子恒東京宣教センター次長があいさつ。聖師さまの「吉岡発言」に触れながら、日本には平和へと牽引する使命と責任があると強調。また、安全保障法制やTPP、原発再稼働などの諸問題の根底は、生命を軽んじる「利己主義」「弱肉強食」の精神であると述べた。

続いて、終戦70年の「平和アピール」が朗読され、大本・人類愛善会の平和への取り組みと誓いを新たにした。

その後、関東教区青松会員による「霊界物語役割拝読」（第52巻「水車」）が奉納された。

関東教区青松会のみなさん

大本公開講座

第150回大本公開講座は、8月19日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、斉藤泰大本教学研鑽所事務局主幹が「なにが問題か『脳死臓器移植』『死刑』『尊厳死』―大本の生命倫理活動―」と題して講演した。参加者は40人（内、一般11人）。

講座では、「万物には神の分霊が宿っているので、生命を大切にしなければならない」と述べ、生命倫理活動・平和活動において、人群万類愛善精神の大切さを説いた。

参加者からは、「改めて生命の尊さを考える良い機会になりました（男性・一般）」等の声が寄せられた。

武器をもたない平和活動を

関東教区青松会主催 元気が出る研修会

日　時　10月11日（日）月次祭後 14時開始（受付：13時半から）

場　所　東京宣教センター・講座室（2階）

講　師　猪子 恒 東京宣教センター次長

講　題　「活力あふれる未来へ」

座談会　講座終了後、15時半から予定

参加費　無料。座談会参加の方は500円

担　当　山口 信（茨城主会青松会）

第24回家庭平安祈願祭

日　時　10月17日（土）午前10時30分

場　所　東京宣教センター・ご神前

申し込み　申し込み者は信徒・一般を問いません。ご本人に代わっての申し込みも可能です。所定の申込用紙に必要事項を明記の上、祭典玉串（任意）を添えて、所属の機関、または東京宣教センター祭務課までお申し込みください。

締　切　10月12日（月）必着

その他　ご祈願は祭典後1週間執り行います

第19回大本少年祭

1・2・3で未来にジャンプ！
～自分史上一番アツイ夏～

関東教区からは24名が参加し、下記の成績をおさめました。

◇総合

6位 神奈川主会少年部

◇神書個人拝読

小学3・4年生 松の部　3位 鈴木碧希（神奈川）
小学5・6年生 松の部　3位 吉田聖晏（茨城）
中　学　生　松の部　1位 森　澄子（神奈川）
梅の部　3位 村井晴叶（茨城）

◇神書役割拝読

松の部　3位 茨城主会少年部

◇朗詠

松の部　1位 茨城主会少年部

◇文芸展示

写真の部　銅賞 下向菜々美（神奈川）

◇冠省句

人位 松浦和日（茨城）

東光苑祭典・行事予定

9月

11日（金）午後7時執行
全国一斉世界平和祈願祭

13日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・長寿感謝祭・交通安全祈願祭・秋季合同慰霊祭

16日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題「もったいない」精神に立ち返る～大本のエネルギー・環境問題への提唱～
講師 山田　歌（大本教学委員）

21日（月・祝）～23日（水・祝）
東光苑道場講座

23日（水・祝）午前10時30分執行
三代教主毎年祭（25年）

26日（土）27日（日）
東光苑秋季祭式講習会

27日（日）午後6時
東光苑秋をめでる夕べ

10月

11日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

17日（土）午前10時30分執行
家庭平安祈願祭（24回）

18日（日）午後7時
霊界物語全国一斉拝読会（48回）

21日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題 一つの世界を目指して～大本と世界連邦運動～
講師 猪子　恒（東京宣教センター次長）

大本東京本部ホームページ
URL http://oomoto-tokyo.